学苑・日本文学紀要　第九一五号　六九～八一（二〇一七・一）

遠藤周作「深い河」論

――グレアム・グリーン「燃えつきた人間」の受容について

笛木美佳

一．遠藤周作とグレアム・グリーン

遠藤周作はカトリック作家として、その信仰問題を扱う姿勢から、「日本のグレアム・グリーン」[1]と呼ばれた。周知のとおり、青年期からのグリーン作品愛読者で、日記の読書記録のみならず、公にした言及も多く、グリーンと直接のやりとりもあった[2]。

その影響関係については、「沈黙」[3]―「権力と栄光」（*The Power and the Glory* 一九四〇年）、「深い河」―「情事の終り」（*The End of the Affair* 一九五一年）が顕著な例として検証されてきたが、本稿では新たな受容関係――単なる受容を超えた、より重い意味を孕んだ関係として、「深い河」―「燃えつきた人間」（*A Burnt-Out Case* 一九六一年）を提示、検証する。「燃えつきた人間」は、遠藤文学研究においては看過されてきたが、たいへん重要な作品である。

第一にこの作品は、遠藤が「深い河」執筆中に再読したと、『深い河』創作日記[4]」に記されている。読みはじめたのは、平成四年二月十七日（日付重複）である。同年二月四日に「小説を書く途中、私はあるトーンを耳につけるため、屢々、モウリヤックかG・グリーンの小説を読む」と記しており、一つの慣例としてグリーン作品を手に取ったようである。平成四年の初めは、「深い河」の構想はまだ揺らいでいたものの、「人間の哀しさが滲む小説を書きたい。それでなければ祈りは出てこない」（一月六日）との方向性ははっきり定まった頃である。一月二十六日には、グリーン作品として最初に手に取った「ヒューマン・ファクター」（*The Human Factor* 一九七八年）の邦訳の一節、第三部第三章2、二重スパイのカースルが夜、妻のセイラにしんみり語りかける言葉、「おれはしばらくの間、彼の神を信じる気持になった。ただし半分ほどだ。カーソンの神を半ば信じたようにだ。どうやら俺という人間は何事につけ、半分しか信じられないように生れついたらしい」をまず抜き書きし[5]、「主人公、カースルの言葉は私の小説のなかで積極的な主題になる」と記した上で、「　」書きで次のようにまとめている。

> 「おれは基督教の神もヒンズーの神も半分信じる気持になった。大事なのは宗教の形ではなく、イエスの愛を他の人間のなかで発見した時だ。イエスはヒンズーのなかにも仏教信者のなかにも無神論のなかにもいる」

この〈信仰〉〈半信仰〉〈無信仰〉は「燃えつきた人間」の主要テーマであ

る。

その後も小説は「遅々として進まず。イメージの硬化、たどたどしい文章。老齢のせいで活力が文章にない」（二月十三日）と難航、「救いをグリーンの小説を読むことに求める」が、次に手に取った「情事の終り」は救いとならなかったようである（同日）。そのような状況下、その次に読んだのが「燃えつきた人間」だったのである。今ひとつ付け加えておくと、二月十六日に、ミサで「少年時代の」「夙川の教会の思い出が蘇り」「幸福感に充され」、「ここは生活ではなく人生だと心の底から思った」との体験を記している。これは後述するが、「燃えつきた人間」に登場する主人公ケリイの憧憬の地、ペンデレと密接に関わる体験である。迷うことなく選んで手に取ったさまがうかがえる。(6)

第二に、遠藤のグリーン作品への言及（日記の読書記録も含む）を調査したところ、七十五件を数えた。それらを大まかに分類すると、〈内容に関わるもの〉〈技法に関わるもの〉〈感想その他〉となり、作家としての経験を積むにつれ、作品〈内容〉についての言及が減り、〈技法〉に関する言及の占める割合が増えていくが、「燃えつきた人間」に対しては晩年であるにもかかわらず、すべて〈内容〉に関わる言及となっており、参考にしている度合いの強さがうかがえる。

第三に、長崎市遠藤周作文学館に所蔵されている遠藤の旧蔵書を調査したところ、この書物への書き込み数は全二十四箇所で、グリーン作品の中では突出している。(7)

以上「燃えつきた人間」は、遠藤文学研究において、慎重な検討を要する作品なのである。

二．二作品の類似点――設定の重なり

「燃えつきた人間」のあらすじを以下に記す。

ヨーロッパで教会建築家として名を馳せたケリイは、神のためと信じて疑わなかった仕事への情熱も、女性への愛も、すべて自己満足のためだったと気づき、苦悩も笑いも失ってしまう。何もかも捨てて、偶然コンゴの奥地へ来た彼は、空虚な「燃えつきた人間」として修道院に滞在するが、ハンセン病施療院(8)でコラン医師と接し、語りあう中で次第に自分の第二の人生を見出し、笑いも取り戻していく。そして、治癒したハンセン病患者（燃えつきた患者　A Burnt-Out Case）であるデオ・グラチアスを従僕として、彼の語った幸福の地ペンデレにあこがれを抱きながら、名声や過去の自分を忘れ、新たな生活を営もうとする。ところが、元神学生のライケルや修道院のトマ神父らが「あのケリイ」「隠遁した聖者」として過剰な期待とイメージを押しつけ、第二の人生が軌道に乗りかけた矢先、自分の妻マリイとの関係を疑ったライケルによって撃たれ、「不条理」な死を遂げる。

以下二作品を比較し、その受容の状況について明らかにしていく。

a　小説と創作日記

「燃えつきた人間」には対になる創作日記がある。グリーンは「燃えつきた人間」の主人公となるX（後のケリイ）の人物像を固め、作品の構想を練るために、一九五九年にベルギー領コンゴを訪れ、創作日記『作中人物を求めて――二つのアフリカ日記』（*In Search of A Character: Two African Journals*）を書き、「燃えつきた人間」と同じ年、一九六一年に出

版した。その日本語訳は「コンゴ日記――主人公捜索――」に「西アフリカ輸送船記」「インドシナ日記抄」「ヴェトナム通信」を合わせて、『コンゴ・ヴェトナム日記』[9]と題して出版された。遠藤が読んだこれらの邦訳本は長崎市遠藤周作文学館に所蔵されている。

・『燃えつきた人間』（田中西二郎訳『グレアム・グリーン選集』14、一九六一・五、早川書房）
・『コンゴ・ヴェトナム日記』（田中西二郎訳『グレアム・グリーン選集』15、一九六五・五、早川書房）

この二冊の遠藤旧蔵書の自筆書き込みを確認したところ、『燃えつきた人間』には『コンゴ・ヴェトナム日記』の関係ページが、また『コンゴ・ヴェトナム日記』には『燃えつきた人間』の関係ページがそれぞれ書き込まれており、遠藤がセットで読んだことがうかがえた。が、その年代特定は難しい。

遠藤は「燃えつきた人間」中の癩偏愛狂（レプロフィル）の話――ハンセン病が特効薬DDS錠剤によって駆逐されたために、自分の愛徳の実践の場が失われて嘆く修道女の話に注目し、鉛筆で印をつけている。そしてこの挿話を一九六三年十月発表の小説「雑木林の病棟」[10]において次のように取りあげている。

> 修道女と別れたあと、T君が仕事を終える間、ぼくは事務所の応接間で一人、待っていたのだが、隅の本箱にグリーンの小説を偶然、みつけたのだった。癩病院を扱った小説だったから、ここでも修道女や来客のために買ったのかもしれぬ。パラパラと頁をめくっていると、こんな箇所があったのだ。

以下、「新薬、D・T・T（マ）（マ）[11]ができた時、アフリカの癩院の修道女たちの間に」、「自分たちの愛を燃やす機会が」「永遠に失われること」を「辛がって、「パニックが起きた」と続けている。この挿話の取り込み状況から、「燃えつきた人間」は一九六三年以前には読まれたと言えよう。ただし、先に示した通り、遠藤所蔵の『コンゴ・ヴェトナム日記』はまだ刊行されていないので、セットで読んだ年代は特定できない。

ここで今ひとつ留意すべき点がある。それは、旧蔵書『コンゴ・ヴェトナム日記』の表紙、作者名の上に「アルバハラード」と黒ペンの書き込みがなされていることである。これは「深い河」（六章）に記されたインドの地名「アラーハーバード」[12]と考えられる。「創作日記」には、「コンゴ日記」についての言及はないが、「深い河」に登場するインドの地名を、他とは異なる筆記具で記している（遠藤の蔵書書き込みは鉛筆、もしくは赤鉛筆・青鉛筆が多い）ことから、時期を隔てて、「深い河」執筆時にも再読した可能性を指摘できる。

さらに、「燃えつきた人間」と「コンゴ日記」のセットと、「深い河」と「創作日記」のセットの類似性を指摘しておく。遠藤は日常のできごとの記録の合間に「深い河」執筆の進捗状況、登場人物や作品構想の変化を「創作日記」に綴っているが、この形は次に一例を示すように、「コンゴ日記」に非常によく似ている。

> 「コンゴ日記」（一九五九年）二月十二日　司教の船の上にて（一部引用）
>
> この数日、はたしてこの小説で何か出て来るかどうか、いよいよますます悩みが深くなる。おそらくわたしは真実を受けいれず、逆に真実に抵抗してもがいているのだろう。（中略）たぶんXは、病院の患者の指を動かす練習の手つだいをし、アルコールで手を洗うわかりきった用心をすることを忘れ、病気に捕えられる。司祭たちは人生とか神とかよりも工学技術や電気や船の

操縦その他のほうに関心を持っている――だがそれはXの誤った印象なのだ。彼は愛のあたらしい形式を求めてこの地へ来て、電力タービンや建築の問題にぶつかり、司祭たちが彼を理解しそこなうのに劣らず彼も司祭たちを理解しそこなうのだ。〃船尾の外側デッキの水は焦げた砂糖の色をしている。〃冒頭のセンテンスはたぶんこうなるだろう――「毎日、朝食後に、船長はデッキ・ハウスのなかで彼の聖務日課を読んだ」[13]（引用者注　遠藤は蔵書のこの部分に『燃えつきた人間』との対応を示す「P40」との書き込みをしている。）

「創作日記」（一九九二年）二月九日（日）（一部引用）

今日書いたのは人肉をビルマ戦線で食べた男、津田の入院の場面。／言葉やイメージが乏しい。グリーンのうまさが羨しい。／この津田の物語のあと／動物と人間との交流。――動物をイエスの象徴として。／その書き出し／「神は人間の口を通して語りかけると言うが、時として神は鳥や犬や人間がペットとして愛する生きものの口を通しても語りかけるのではないだろうか」

遠藤はエッセイ「執筆中の感想」[14]に、「小説家は自分の楽屋など見せるべきではないが、執筆しながらこの創作日記を小説の後に印刷してもらったなら面白いかもしれぬなどと、そういう気持になることも度々ある」と書いており、ここにもグリーンの先例が意識されていると見られる。

b　舞台設定

「深い河」と「燃えつきた人間」の舞台設定には重なりが見られる。「燃えつきた人間」は、コンゴ川の支流、船で遡上できるぎりぎりのところにある、修道院経営のハンセン病施療院が舞台になっている。ケリイはここを「何もない空っぽな場所」（二・三・1）[15]であるがゆえに留まり、建築士としての過去の栄光を捨て、新しい生活を始めようと目論んだのである。そのため、施療院のコラン医師から新病院建築の手助けを打診された時、躊躇した。しかしその拘りを払拭したのは、コラン医師の次の言葉であった。

医師は性急に言った。「つまらん遠慮だよ」／（中略）「事情なんぞ、誰が気にかけるかね？」医師は言ったが、その〃誰が気にかけるかね？〃という問いが、少年の頃におぼえた詩の一行のように、ケリイの頭のなかで、憑きもののように反響しつづけた。（二・三・2）

舞台であるコンゴの奥地は、ヨーロッパとは異なる価値観が生きている世界、すべてを無条件に受け入れる場所として、設定されているのである。

一方「深い河」はインド、ヴァーラーナスィが舞台である。ガンジス河のほとり、ヒンズー教の聖地である。ここに大津はキリスト教の神父でありながら、日本人ゆえの「無意識に潜」む「汎神論的な感覚」（六章）のために異端者と見做され、ヨーロッパを追われ、イスラエルを経由して流れてきた。かつて大津を弄び棄てたものの、その生き方に無関心ではいられず再会した成瀬美津子は、ヒンズー教の行き倒れの巡礼者を運ぶ大津に、「ヒンズー教徒に改宗したのですか」と尋ねる。しかし、「いいえ、ぼくは……昔のままです。これでも基督教の神父です。しかしヒンズー教徒のサードゥーたちがあたたかく迎えてくれました」（九章）と答えているように、彼は異なる宗教の民によって受け入れられ、彼もまた、受け入れている。添乗員の江波も、「ヨーロッパや日本とまったく違った、まったく次元を異にした別世界」、「忘れていた別の世界に今から入っていく」（六章）の

だとツアー客の注意を喚起する。ここは、ヨーロッパや日本とは異なった価値観が生きている世界なのである。自分を混沌とした女と意識する美津子も、それを強く意識している。

（前略）仏蘭西なんて、あまりに秩序だって、混沌としたものがないんですもの。カオスがなさすぎますわ。（中略）それにくらべると、この国の乱雑さや、何もかもが共存している光景や、善も悪も混在しているヒンズー教の女神たちの像のほうが、かえって性に合うんです。（八章）

以上「燃えつきた人間」と「深い河」は、いずれも、ヨーロッパをはじめとする先進国とは異なる価値観を有する舞台が設定されているのである。

c　異なる宗教の受け入れ

異なる宗教の受け入れの姿勢も、両作品に見られる。

「燃えつきた人間」には土着のヌザムベ信仰があり、キリスト教と対立している。しかし、修道院の院長は説教の中で、ヌザムベ信者の中にもキリスト教はかくれていると話す。

（前略）あの人（引用者注　コランとは別の医者）はヌザムベの神に祈り、わるい薬をつくっています。あの人はいつわりの神をあがめておるが、一度ある男の子が病気になり、その両親が入院しておったとき、あの人は金を取らなかった。わるい薬はくれたが、金はとらなかった。その男の子のためにヌザムベと長い神がかりの相談をしたが、金はとらなかった。わしは言う、あの時の彼はキリシチャンであった、（中略）彼はイエズーを信じないが、彼はキリシチャンです。（四・一・1）

さらに、ケリイの死後、デオ・グラチアスがその墓の盛土のわきに、「ヌザムベへの供物らしくみえ」る、「奇妙な形にからませた小枝や草をいっぱいに詰めた古いジャム壺を一つ置いた」時、ある神父は撤去しようとするが、他の神父の取りなしで残された（六・三・6）。ここには宗教に対する寛容が見られる。

「深い河」では前掲のとおり、キリスト教神父の大津が、ヒンズー教の行き倒れの巡礼者をガンジス河に運ぶ仕事をしている。彼は、宗教の違いを指摘する美津子に、「そんな違いは重大でしょうか」、「玉ねぎ（引用者注　大津と美津子の間で了解されている語で、イエスを指す）がこの町に寄られたら、彼こそ行き倒れを背中に背負って火葬場に行かれたと思うんです。ちょうど生きている時、彼が十字架を背にのせて運んだように」と答え、さらに、「力つきた彼等が、河のほとりで炎に包まれる時、ぼくは玉ねぎに」「ぼくが手わたすこの人をどうぞ受けとり抱いてくださいと」祈るという。それは、「玉ねぎがヨーロッパの基督教だけでなくヒンズー教のなかにも、仏教のなかにも、生きておられると思うから」（十章）である。

いずれの作品にも、異なる宗教の受け入れの姿勢が見られる。

d　登場人物の重なり

「燃えつきた人間」にも「深い河」にも深刻な悩みを抱えた人物が登場する。ケリイと美津子である。どちらも空虚で、誰も愛せない自分を自覚している。

仕事への情熱も、他人への愛も、神への信仰も失ったケリイを、コラン医師は、「燃えつきた患者」と呼ぶ。これは、「癩菌に喰いほろぼされうるものをすべて失って、その上で全快した癩患者」（四・三・2）になぞらえ

たものである。しかしケリイは、コラン医師にしばしば自分の思いを語ることで、自己を冷静に見つめ、自らの居場所を確立しはじめた。さらに手足の指はすべて失ったものの全治し、「燃えつきた患者」となったデオ・グラチアスを従僕として身近に置き、共に過ごす中で、他人に関心を抱くようになり、笑いを取り戻していく。加えて作品終盤で、彼は自伝的なおとぎ話「王様と宝石職人の話」を夜通しライケルの妻マリイに語り、信仰の見通しを得る（「三．母なる宗教」で詳述する）。その後ライケルの誤解を受け、築きつつある新しい生活も「幸福」（四・二・1）も捨ててここを去らねばならないと思う時、苦痛も取り戻すのである。

「深い河」の美津子も学生時代から「心はいつも虚ろ」（三章）で、新婚旅行の最中でさえ、「自分が他の女性たちとちがって、誰かを本気で愛することができ」ず、「砂地のように乾ききって、枯渇した女。愛が燃えつきた女」（三章）であると自覚している。離婚後も、病院のボランティアで「愛のまねごと」をする一方で、「男との愛欲の真似事」を繰り返すが、「愛が燃えつきたのではなく、愛の火種のない女」（六章）であることを突きつけられたのみであった。彼女は本当の愛を求めて、かつて自分が捨てた後、神父になったという大津を追って、インドのツアーに参加する。

そして、他のツアー客やチャームンダー像との出会い、大津との再会を通して、他者への犠牲、転生という形での愛の連鎖を実感していく。

ケリイが他者に語ることで新たな自己を見出したように、「深い河」でも、多くの人物が他者に自分の状況、心境を語る。大津は、対面してのみならず、手紙のやりとりでも美津子に自分の信仰について語る。

美津子もガンジス河の沐浴で、祈りという、心の奥底からの希求の形で自分を開く。「本気の祈りじゃないわ。祈りの真似事よ」と「弁解し」ながらはじめた祈りは、「やっと過去の多くの過ちを通して、自分が何を欲しかったのか、少しだけわかったような気もする」との自己認識に導く。

> 「信じられるのは、それぞれの人が、それぞれの辛さを背負って、深い河で祈っているこの光景です」と、美津子の心の口調はいつの間にか祈りの調子に変っている。「その人たちを包んで、河が流れていることです。人間の河。人間の深い河の悲しみ。そのなかにわたくしもまじっています」（十三章）

以上、登場人物の重なりとして、ケリイと美津子を比較したが、先の「b　舞台設定」で触れたように、大津とケリイも重なるところが多い。それについては、続く「三．母なる宗教」「四．「不条理」な死に付与されたものの対照性」で明らかにする。なお、遠藤の『燃えつきた人間』への書き込み、全二十四箇所のうち、約半数の十一箇所はケリイの空虚感が描かれたところに対してであった。

三．母なる宗教

「深い河」は周知のように、母なるものに心をゆだねる物語である。

美津子が強く惹かれたチャームンダー像は、「印度人と共に苦しんでいる」、「印度の母なるチャームンダー」（七章）と説明され、「母なるガンジス河」は、「生ける者も死せる者も受け入れ」る「聖なるもの」（七章）と語られ、大津の信仰と重なる。

大津はヨーロッパのキリスト教に違和感を抱き、リヨンの修道院を追われ、アルデッシュの修錬院にいる時分、美津子に手紙の中で次のように語った。

少年の時から、母を通してぼくがただひとつ信じることのできたのは、母のぬくもりでした。母の握ってくれた手のぬくもり、抱いてくれた時の体のぬくもり、愛のぬくもり、兄姉にくらべてたしかに愚直だったぼくを見捨てなかったぬくもり。母はぼくにも、あなたのおっしゃる玉ねぎの話をいつもしてくれましたが、その時、玉ねぎとはこのぬくもりのもっと、もっと強い塊り――つまり愛そのものなのだと教えてくれました。大きくなり、母を失いましたが、その時、母のぬくもりの源にあったのは玉ねぎの一片だったと気がつきました。そして結局、ぼくが求めたものも、玉ねぎの愛だけで、いわゆる教会が口にする、多くの他の教義ではありません。（六章）

この母の愛と密接に結びついた玉ねぎへの信仰は、インドではより大津に近いところにあり、彼は迷うことなくその神への信頼を貫いている。彼は再会した美津子に、玉ねぎは裏切られても弟子たちを愛し続けたので、「彼等一人一人のうしろめたい心に玉ねぎの存在が刻みこまれ」、「彼等の心のなかに生きつづけ」た。玉ねぎは死んでも「弟子たちのなかに転生し」、「あなたの前にいるこのぼくのなかにも生きている」（十章）と語るのである。

この大津の〈母の愛のもっと強い塊りとしての玉ねぎの愛〉、〈玉ねぎは弟子たちの、さらに大津の心のなかにも転生して生き続けている〉という信仰は、その後美津子に強く響く。彼女はインドを去る時見かけた、マザー・テレサの修道女たちの献身の行為や、「それしか……この世界で信じられるものがありませんもの。わたしたちは」（十三章）という修道女の言葉に接して、それを確かなものとして受けとめていく。

その人と言ったのならば、それは大津の「玉ねぎ」のことなのだ。玉ねぎは、昔々に亡くなったが、彼は他の人間のなかに転生した。二千年ちかい歳月の後も、今の修道女たちのなかに転生し、大津のなかに転生した。（十三章）

この「深い河」の〈母の宗教〉と〈神は心のなかに〉という信仰の形は、「燃えつきた人間」でも描かれている。

まず、ケリイが訪れたコンゴは、「この国では、自分の父親を知っている人間はごく少」く、「子供たちは母親に属しています。たぶんそれ故にプロテスタントよりもわしらを、そして聖母をここの人々は好むのでしょう」（四・一・2）と修道院長が語る地である。ちなみに、遠藤は蔵書のこの部分に書き込みチェックを入れ、関心を示している。

さらにケリイは、デオ・グラチアスから聞いたペンデレという言葉――母親と密接に関わる言葉に強く惹きつけられるが、それは、次のような経緯で発せられたものであった。自分の失態をとがめないケリイに対し、同情ゆえと誤解し、ジャングルに遁走、失踪したデオ・グラチアスをケリイが探しあてた時、デオ・グラチアスは沼地に落ちて、身動きできなかった。ケリイ一人では救出できず、援助を求めるため、夜のジャングルにデオ・グラチアスを残して戻ろうとした時、ケリイは「恐怖にとりひしがれ」（二・四・1）たデオ・グラチアスから「必要とされ」（二・四・2）、朝まで共にいることを選択した。その時にデオ・グラチアスが口にしたのが「ペンデレ」だったのである。

彼はデオ・グラチアスを安心させるつもりでその手をとった――というよりも自分の手を彼の手にくっつけてやった。指のない手をとることはできないのだ。デオ・グラチアスは二度うなり、それから一つの言葉を口にした。それは〝ペンデレ〟と言ったように聞きとれた。（二・四・1）

遠藤の書き込みチェックが入っている部分である。この夜、ケリイはペンデレの意味をデオ・グラチアスから聞き出し、後にコラン医師に次のように語る。

「どこか森のなかの、水に近い、あの男にとって非常に大切なことが起こりつつある場所だ。癩院にいた最後の日[16]、あの男は首を絞められるように感じたという（中略）癩院に空気が不足して、踊ったり叫んだり、走ったり歌ったりしたくなったそうだ。だが、かわいそうに、あの男は走ったり踊ったりはできないし、歌いたいと思う種類の歌は神父さんたちが気に入ってくれない。それであの男はその水辺の場所をみつけようとして出かけた。そこは子供のときに一度、母親につれてゆかれたところで、そこで歌ったり踊ったり遊んだりお祈りしたりしたことを憶えているのだ」（二・四・2）

ペンデレはデオ・グラチアスにとって、母親の思い出とつながる地、不安や閉塞感・孤独を突き破る解放の地である。空虚感にとらわれていたケリイにとってもペンデレは憧憬の地となり、デオ・グラチアスにさまざまな問いかけをしてはその実態をつかもうとする。

「水は、空から落ちていました」／「滝か？」だがこの言葉は、河と密林との平坦な地方にいるデオ・グラチアスには何の意味もなかった。／「その頃、お前はお母さんの背に負われた子供だった。ほかにも子供は大ぜいいたか？」／彼は首を振った。／「話してくれ、どんなことがあったんだね？」／「わたしたちは幸福でした」デオ・グラチアスは言った。（三・二）

ペンデレとは、子供のデオ・グラチアスにとって、非日常を強烈に印象づける場であったと同時に、否それ以上に、背負われたぬくもりの感触とともに、母親に愛された「幸福」の象徴であったことがうかがえる。であるからこそ、強い関心を抱いたケリイが「この次、お前がここを出るときは、わたしをいっしょに連れていってくれないか？」と頼んでも、「答えなかった」（三・二）のであろう。つまり、ペンデレはデオ・グラチアスにとっては、他人の介入を許さない、神聖な心の支えと考えられる。

その後もう一度、ケリイがペンデレについて尋ねる場面がある。

「お前はあれきり森へは入って行かないね、わたしはお前があそこへわたしを連れていってくれないことは知っている……だがそれでもやっぱりわたしは行きたい……ペンデレはそんなに遠いのかね？」／デオ・グラチアスは何とも答えず、頭をさげていた。（六・二・2）

ここでも、神聖な心の支えに対するケリイの介入を拒む姿がうかがえる。

ところが時が経過し、ケリイがコラン医師と協力して建築中の新しい病院の棟上げ式が行われた後で、デオ・グラチアスがケリイを訪ねてきた場面では、彼の態度は一変する。

ケリイは、「お前はまた逃げることを考えているんじゃあるまいね？」と言って、巻煙草に火をつけ、それを不具者の口にさしこんでやった。／「いえ、考えていません」とデオ・グラチアスが言った。／闇のなかで、この男の切株が自分をつっついているのをケリイは感じた。彼は言った、「何を心配しているのだ、デオ・グラチアス？」／「あなたは行ってしまうんでしょう」デオ・グラチアスが言った、「病院が建ってしまったから」／「いいや、行きゃしないよ。わたしが一生を終える場所はここだ。わたしはもといたところへ帰ることはできないのだよ、デオ・グラチアス。あちらとはもう縁が切れてしまっ

たのだ」／「あなたは人を殺したんですか？」／「何もかも殺してしまった」（中略）／デオ・グラチアスがひょこひょこと近寄った。「わたしはあなたといっしょに行きます」と彼は言った。／「わたしはここにずっといると言っているのだよ。なぜわたしを信じないのだ、お前は？　これからさきの一生、ずっとだよ。わたしはここの土の下に入るのだ」／雨の音が大きいので、彼の言葉は聞こえなかったのだろうか、デオ・グラチアスはくりかえして、「わたしはあなたといっしょにゆきます」と言った。（六・三・1）

この場面のデオ・グラチアスは、自ら不自由になった手でケリイに接触を求め、ひきとめている上に、自らの決意を懸命に伝えている。それまでの彼の、〈問われてはじめて答える〉という姿勢を崩して意志を示している点に留意すべきである。デオ・グラチアスはぬくもりを伝えるとともに、ケリイに絶対の信頼を示しているのである――母親に甘える子どものように。ケリイも彼の仕草で「心配」を察している。つまり、信頼は双方向であると言える。

ケリイはデオ・グラチアスの問いかけに対し、ヨーロッパにいた頃の自身をも含め、生活の一切合切を捨て去ったことを、「何もかも殺してしまった」と物騒な表現で答えている。このケリイの事情をデオ・グラチアスは知る由もない。にもかかわらず彼は、「わたしはあなたといっしょにゆきます」と言う。

ここからは二つの意味が読める。一つは、たとえケリイがいかなる人物であろうとも、私はついて行く、という意味である。デオ・グラチアスは「〝神に感謝する〟という意味のラテン語をとって名にしている」（一・二・1）のであるから、ケリイにとって、常に身近に神の愛を意識する機会が与えられるということになろう。(17)

今一つの意味は、先のケリイの問いかけ、「だがそれでもやっぱりわたしは行きたい……ペンデレはそんなに遠いのかね？」（六・二・2）に対する答えである。彼は〈ペンデレに一緒に行く〉と答えたのである。

この二つの意味を合わせて考えると、ペンデレは単なる実在する場所との意味を超えて、ぬくもりの存在する場所、〈心の中にある、神に見守られた人間同士の強い信頼、つながり〉〈愛を実感する場所〉なのではないか。ペンデレは幸福の象徴として母親からデオ・グラチアスに与えられ、デオ・グラチアスからケリイに伝えられようとしているのである。そしてこのペンデレ、すなわち〈心の中にある、神に見守られた愛のある場所〉こそ、「深い河」で大津の語る、「玉ねぎの愛」に通じるのではないだろうか。

「燃えつきた人間」にはもう一つ大切な信仰が描かれている。それは、先述のケリイの自伝的なおとぎ話「王様と宝石職人の話」の中にある。彼はマリイに、次のように話す。

宝石職人（ケリイ自身をたとえている）は、「歴史学、論理学、哲学、語原学などの方法で」「存在することを証明」できる王様（神をたとえている）を信じ、その王様のために宝飾品をデザイン（教会を建築）してきたと思っていた。「自分の仕事を愛するとき、自分は王様を愛していると信じ、また女と情事をするときも少くとも間違ったやりかたではあるにしても王様のその民への愛を真似しているのだと大まじめに信じていた」（六・一・2）。

しかし自分が信じていたような王様なんぞいないんだということを発見した

とき、彼は自分がこれまでにして来たことはすべて自分自身への愛のためにして来たことだったにちがいないということをも認識した。（中略）彼は自分の両親の単純で紛れのない心がうらやましくなって来た――両親は王様が百マイル離れた、聖ペテロ聖堂のように大きな、冷やかな宮殿にではなく、いつも心のなかに住んでいると信じていたのだ。（六・一・2）

夜通し、自分の過去と信仰の苦悩をたとえ話として語り、両親をうらやましく思うところまで行きついたその明け方、彼に新しい光が差す。

ベッドに腰をおろしていると、みるみるあたりが明るくなった――涼しい一刻だった。彼は思った、王様は死んだ、新しい王様万歳。おれはここに一つの国、一つの生活を発見したようだ。（六・一・2）

この一連のできごとは、彼が教会の神ではなく、自分の心の中に神を見出したことを示していよう。これは「深い河」の大津が、ヨーロッパのキリスト教に違和感を覚え、〈母の愛のもっと強い塊り〉としての神を、苦心の末に確信したのと通じている。

遠藤にとって「燃えつきた人間」は、設定のみならず、主要テーマである母なる宗教観においても、響きあう作品だったのではないか。「深い河」は、特にその影響を強く受けていると推測できるのである。

四、「不条理」な死に付与されたものの対照性

以上検証してきたように、「深い河」には「燃えつきた人間」の影響が色濃くうかがえるのであるが、さらに作品のエンディングの設定も似ていることを言わねばなるまい。「燃えつきた人間」のケリイは、夫ライケルから逃れたマリイにせがまれて「王様と宝石職人の話」を夜通し語り続けたが、その関係を誤解したライケルによって射殺される。一方の「深い河」の大津は、注意を無視して火葬場の写真を撮っていた三條の身代わりになってヒンズー教徒たちに襲われ、危篤となる。二人とも「不条理」な死を迎えるのである。

しかし、「不条理」な死という形は似ていても、そこに込められた意味は大きく異なる。最後にその点について述べる。

「深い河」の大津は、美津子によって、聖書のイザヤ書五三章の苦難の僕（しもべ）になぞらえられる。

彼は醜く、威厳もない。みじめで、みすぼらしい／人は彼を蔑み、見すてた／忌み嫌われる者のように、彼は手で顔を覆って人々に侮られる／まことに彼は我々の病を負い／我々の悲しみを担った（十三章）

したがって、彼は死んで転生（復活）する必要があった。[18] 加えて、最後の場面で大津は「美津子を笑わせるために」「冗談を言」い、「これで……いい。ぼくの人生は……これでいい」と「心のなかで自分に向って呟いた」（十三章）。イエスに倣った死、納得の上での死を迎えたと言える。それを見守った美津子も後にマザー・テレサの修道女たちの献身の行為を見て、玉ねぎが「修道女たちのなかに転生し、大津のなかに転生した」（十三章）と感じた。つまり、大津の信仰を美津子が理解し、大津が美津子の心の中に転生していくのである。一見すると「不条理」であるが、大津の死は大津の信仰を体現したもの、受け継がれていく死、開かれた死と言える。

一方「燃えつきた人間」のケリイは、「新しい王様」を発見し、新たな生活の可能性を見出し、互いに信頼するデオ・グラチアスという従僕も得

て、確かな幸せをつかんだ矢先に殺された。その場面を引用する。

「どうぞ司祭館へおいでください、ライケルさん」フィリップ修道士が懇願した。「（中略）おたがい、みんな一晩よく寝れば、ずっと気持がよくなるでしょう。そして朝、冷水のシャワーを浴びれば」そう彼が附け加えたのを絵に描いてみせるように、急にザアッと雨がかれらの上に落ちて来た。ケリイは奇妙な、不器用な喉の音をさせ、それは医師が近頃では笑い声と解釈できるようになっているもので、そしてライケルは二発、射った。ランプがケリイといっしょに地に落ちて砕けた。燃える灯心が一度は土砂ぶりの雨の下でパッと明るく燃え、開いた口とおどろいた眼とを照らしたが、すぐに消えた。／（中略）ライケルの声が言った、「おれを笑いおった。よくもおれを笑ったな」（中略）／「ライケルをじゃない」ケリイが言った。医師は彼の身近に余計にからだを伏せた。何を言っているのか、ほとんど聞きとれなかった。（中略）／ケリイは言った、「自分を笑ってるのだ」／（中略）「この男は簡単には笑わないのだ」と医師が言うと、またもう一度、おかしな、笑いに似た喉の音がした。／「ばかばかしい」ケリイは言った、「これはばかばかしい不条理か、でなければ……」だが、でなければ、哲学的、あるいは心理学的に、何だと言いたかったのか、かれらにはついにわからなかった。（六・三・5）

空虚に心を苛まれていたケリイは、笑いを失っていた。グリーンは、彼が少しずつ笑いを取り戻すさまを通して、その心の回復を描いてきた。しかし、その笑いによって死に突き落とされるという、皮肉な最期をケリイに与えたのである。彼の最後の言葉は、「でなければ……」で途切れており、それに続く言葉も、ペンデレも、「新しい王様」も謎のまま蓋をされてしまったことになる。いわば、閉じた死と言える。

ここに形は似ているものの、「深い河」と「燃えつきた人間」に託されたものの、大きな相違が浮かびあがる。この違いには、おそらく「創作日記」に示されている、二人の作家の年齢の差も関係しているであろう。

一九九二年二月十七日（日付重複）晴（一部引用）

グリーンの『燃えつきた人間』を読み始める。いかにも壮年、五十代の小説という作品だ。五十代は迷いの多い年齢という意味でだ。ここにはグリーンの人生の、信仰の迷いが叩きこまれている。／私の今度の小説だって同じだ。違うのは七十歳近くになっても私の人生や信仰の迷いは、古い垢のようにとれない。その垢で私は小説を書いているようなものだ。

「深い河」執筆時の遠藤は六十九歳で、病も重篤、自ら集大成の気持ちで臨んだ執筆であった。したがって、作者自身、解決が必要だったのであろうし、読者に向けても最後のメッセージとなることを覚悟していたはずである。「創作日記」にも、読者の反応を気遣う記述が散見される。(19) 開かれた死には、作者の希望と願いが込められているのではないか。

一方の「燃えつきた人間」は、グリーン五十七歳の作品であり、「不条理」な死は一つの問題提起であった。彼は「燃えつきた人間」の献辞「ミシェル・ルシャー博士に」で、「これは roman à clef ではなくて、信仰、半信仰、および無信仰のさまざまなタイプに劇的な表現を与える企て」と記しており（ケリイは「半信仰」、コラン医師は「無信仰」にあたる）、今後突き詰めていく実験の一つであったと考えられる。閉じた死によって、読者は疑問を抱き、自身の信仰や幸せを問う。つまり、同じように信仰を扱いながら、「深い河」とは信仰追究の目的が異なっており、死に付与された意味あいも対照的なのである。

以上、「深い河」における「燃えつきた人間」の受容について考察してきた。「燃えつきた人間」は、「深い河」全体に大きな影響を有しているのは確かである。しかし、最後の「不条理」な死に託された意味は大きく異なり、その違いを通して、「深い河」にこめた遠藤の真摯な願いが浮かびあがってくる。したがって、私は「燃えつきた人間」を単なる〈受容〉の作品としてではなく、よく味わって理解し、自分のものとして活かしきった作品――〈味得〉の作品として位置づけたい。

注

（1）William Johnston 氏が *SILENCE* (Kodansha International Ltd., 1982) の Translator's Preface で、冒頭次のように述べている。

SHUSAKU ENDO has been called the Japanese Graham Greene. If this means that he is a Catholic novelist, that his books are problematic and controversial, that his writing is deeply psychological, that he depicts the anguish of faith and the mercy of God—then it is certainly true.

また、ヴァン・C・ゲッセル氏も、「戦後日本文学における遠藤周作の（複数の）位置」（『「遠藤周作」と Shusaku Endo』一九九四・一一、春秋社）で、レッテルの一つとして「氏の呼び名としていちばんおなじみなのは、言わずと知れた「日本のグレアム・グリーン」というものでしょう」と紹介している。

（2）「奇遇」（「新潮」一九八五・七、のちに『春は馬車に乗って』一九九二・四、文春文庫）には、〈ロンドンのRホテルのエレベータ内でグリーンと偶然会い、連絡を取ってバーで話したこと〉〈十年前に『沈黙』の英訳が出た頃、手紙を受け取ったこと〉〈英訳本が出ると出版社から彼に送り、度々手紙を受け取ったこと、自分もグリーン作品を仏訳か日本訳で丁寧に読んだこと〉が紹介されている。類似内容は、「先客はグレアム・グリーン」（「THIS IS 読売」一九九四・八、のちに『狐狸庵読書術』二〇〇七・六、河出文庫に所収）他にもある。

（3）以後、遠藤作品もグリーン作品も、作品名としては「　」を、書名としては『　』を用いて表記する。

（4）「三田文學」（一九九七年夏季号、のちに『「深い河」創作日記』一九九七・九、講談社）。なお便宜上「創作日記」と略す。以下同じ。

（5）抜き書きから、遠藤が読んだ邦訳は、句点、漢字の違いが見られるものの、『グレアム・グリーン全集』25　ヒューマン・ファクター（宇野利泰訳　一九八三・四、早川書房）と特定できる。しかし、『遠藤周作文学館　所蔵目録Ⅰ』（二〇〇八・三、長崎市遠藤周作文学館）、「町田市民文学館蔵　遠藤周作蔵書目録（和書篇）」（PDF）（http://www.city.machida.tokyo.jp/bunka/bunka_geijutsu/cul/cul08Literature/machidayukarinosakkatashi.files/endowasyo.pdf、二〇一六年一二月一日閲覧）いずれにおいても確認できなかった。

（6）「創作日記」に従い付言すると、グリーン作品は、「ヒューマン・ファクター」「情事の終り」「燃えつきた人間」「権力と栄光」の順に読まれた。ちなみに数年後発表の「先客はグレアム・グリーン」の中で遠藤は、「私自身は『権力と栄光』『情事の終り』『ヒューマン・ファクター』を最も愛読した」と書いている。

（7）小説以外では『地図のない旅』二十六箇所、『コンゴ・ヴェトナム日記』十五箇所であるが、他の小説はすべて一ケタである。

（8）テキストとした『グレアム・グリーン全集』16では、すべてにわたり「癩病」が用いられているが、本稿では引用部分を除き、「ハンセン病」を用いる。

（9）便宜上、「コンゴ日記」と略す。以下同じ。

(10)「世界」（一九六三・一〇、のちに『遠藤周作文学全集』7　一九九九・一一、新潮社に所収）。

(11)『南山堂　医学大辞典』19版（二〇〇六・三、南山堂）によれば、「1943年Fagetらがプロミン Promin ®の有効性を報告して以来，スルホン剤によるハンセン病の化学療法が行われるようになった．現在ではプロミンよりも（中略）DDSが主体となっている」（引用者注　原文横書き）とあり、グリーンが書いた「DDS」が正しい。

(12)「十月二十八日　アーグラ出発　アラーハーバードよりヴァーラーナスィに向かう／夕暮れ、アラーハーバードの飛行場を出ると、湿気のこもったなまぬるい風が吹いていた」と記されている。なお（六章）は、（六章　河のほとりの町）だが、便宜上章題は省略する。以下同じ。

　アラーハーバードは、『世界大百科事典』1（二〇〇九・六改訂新版、平凡社）によれば、「(Allāhābād) インド北部，ウッタル・プラデーシュ州中南部の同名県の県都」。「ヤムナー川とガンガー（ガンジス）川の合流点に発達した」「行政・経済の中心都市」。「ヒンドゥー教の代表的聖地の一つ」（引用者注　原文横書き）。

(13)『グレアム・グリーン全集』17（田中西二郎訳　一九八二・七、早川書房）

(14)「別冊文藝春秋」（一九九二・六夏号、のちに『遠藤周作文学全集』13、二〇〇五・五、新潮社に所収）。

(15)（第二部第三章1）だが、便宜上（二・三・1）と記す。以下同じ。

(16) デオ・グラチアスは治癒を告げられ、喜びを感じる一方で、癩院（施療院）を去らねばならず、ケリイが従僕として雇わなければ、社会の中で厳しい生活を強いられるはずであった。

(17) ちなみに遠藤は、このケリイとデオ・グラチアスの信頼による結びつきと対照的な、形式主義の愛を作品中に見出し、指摘している。旧蔵書『燃えつきた人間』の第三部第一章2、ライケルが妻のマリイにキリスト教的結婚の観念を強要する節の節番号に○印を付し、その章の最後に、「非常にうまい／愛→基督教的結婚／愛→ケリイとデオ・グラチヤス」と書きこんでいる。重要視のさまがうかがえる。

(18)「創作日記」一九九二年五月（日付なし）にも、「深津（引用者注　後に大津になる）の死はエルサレム入城のイエスの死の上に重ねねばならぬ。賤しめられ、誤解されて愛のために死んでいく深津」と記されている。

(19) 一九九二年四月二十三日「深津に一種の神学論を語らせても読者の興味をひかないだろうという不安を感じながら」など。同年六月十三日、二十二日、二十三日、七月十日、九月十日には読者に対して、十月十七日には日本の文壇に対して、その反応を気にかけた言及が見られる。

＊本文引用は、「深い河」（『遠藤周作文学全集』4　一九九九・八、新潮社）、「燃えつきた人間」（『グレアム・グリーン全集』16　燃えつきた人間　田中西二郎訳　一九八〇・一、早川書房）を用い、便宜上ルビは省略した。

＊この論考は、二〇一五年十二月十二日開催の日本キリスト教文学会　第四三三回月例研究会（ミニ・シンポジウム「女性が〈語る〉グレアム・グリーン文学」）の発表原稿に加筆・訂正を施したものである。

＊遠藤周作のグレアム・グリーンの蔵書を調査するにあたり、長崎市遠藤周作文学館のお世話になった。ここに記して深謝申しあげる。

（ふえき　みか　日本語日本文学科）